

<連載>

サイコロジ

③

そだちと臨床研究会

川畑 隆

大学生になりました

高校の3年間、九州大学医学部付属病院の心療内科に通いました。大腸機能異常という診断名でした。主治医は思春期内科のM先生。卒業前の最後の診察で、心理学科に進学することを伝えると、「君もそういう方向に進むんだね。だったら医学部にしときゃよかったのに」とおっしゃったことをはっきりと覚えています。「医学部なんて行けるわけないやろ」と心の中で同時に叫んだこともですが。それにM先生は「毎回出したお薬ね、アレ、プラセボ（偽薬）だったんだよ」とも教えてくださいました。実はその40年後、私が編集委員の1人をやっていた『そだちと臨床』という雑誌の原稿をM先生にお願いして、書いていただきました。

国公立大学に受かる力がとってもあやしかった私に、奨学金をもらえればどうにかなるからと、私立受験を親が許してくれました。その時の安堵で肩の力が抜ける感覚は今でも覚えています。だって、勉強するのが9科目じゃなく3科目でよくて、その3科目にチンプンカンプンの理数系を入れなくてよかったんですから。それで、世界史の成績だけはトップクラスになり

ました。そして、当時、九州大学を受験する人の滑り止めだった同志社に受かった私を、担任の先生が驚きの目で見上げました。

たびだち

こがらし吹き荒れるから
出てゆくんじゃないと
僕の背中にあつい目がつきささる
心強かった 周りの人たちが
温かいその手を差し出してくれた
窓から外を見て 息を吹きかけ
ストーブの赤い部屋でお茶をすする
道行く人に心を動かされて
ドアに手はかけるが
いつも立ち止まってきた

求める自分の喜び 生きがいを
心に浮かべては人に話すだけだから
さあ いま自分を奮い立たせよう
ぬるま湯の中から旅立たせよう

寂しさを知らなかった僕の心は
しだいに虚しさを抱え込んでいた
さあ 飛び出してゆこう
手を振りほどき
新しい自分をつくりだすために

旅支度をして マフラー首に巻き
一枚の切符をポケットに入れる
頭をこがらし吹き抜けてはいても
でも喜びに肩までつかっている

小倉から京都へ

初々しいでしょう。『たびだち』にはまだ高校生という感じがよく出ています。詰襟制帽が

九州の小倉から京都に出てきました。そして、カルチャーショックを受けつつも、同志社ボーイ・ガールの温かさの中に、少しずつとどろんの中間ぐらいで浸っていきました。

汽車が走らない

声をかけたら 立ち止まり振り返る
見知らぬその顔に 微笑みがよぎる
ほんのこの前までは
見慣れた人たちの中
新しい 懐かしい その微笑みだった
だけど 夜になって
耳をすましてみるけれども
そこには 自分のつぶやきばかり
人が来ない 人が来ない
目の前に浮かぶから 手招きしても
人が来ない 想い出の

ドアを開けたら 少し暗い灯り
さっきの茶碗が こたつの上にひとつ
ほんのこの前までの 賑やかな時間が
しだいに遠ざかってしまうが
また浮き上がる
窓に寄り添い
耳をすましてみるけれども
そこには 川の流れる音ばかり
汽車が走らない 汽車が走らない
ひと眠りして 目が覚めても
汽車が走らない やっぱり

センチメンタリズム

ホームシックという言葉も、「モダン」なんかと同じようにモダンじゃなくなりました。京都市左京区にある八瀬の下宿で、川音を聴きながらふと寂しくなったのを覚えています。『汽

車が走らない』は、このマガジンの前連載「かへだ詩⑤」にも載せました。

八瀬の下宿は、京福電車の終点の八瀬遊園駅から大原方面へまだだいぶ歩かねばなりませんでした。母親が賄い付きの下宿じゃないとダメだと言ったのです。そんな八瀬の夜道を歌詞にしたのが『ふたり』です。これは確実に、南こうせつ曰く「センチメンタリズムの極み」の『神田川』を意識しています。

『かくれんぼ』は、信州から届いた絵葉書の懐かしい影絵に吸い込まれるように書きました。

ふたり

君の湯上りの光った髪が
なおその黒さを増している
洗面器を抱いた君が横に
僕は洗濯物の紙袋を持っている
終電を降りてふたりで歩く
川の流れが心に清い

たまの車のライトが
君を明るく映し出し
君は眩しさに目に手をやり
通り過ぎるとまたふたりの足音が
君はいくらか速めに歩き
僕は君をまもって歩く

大きなごぼんの暑いセーター
君はふっくら包まれて
袖口を引っ張り掌を隠し
その君の細い指先が素敵だし
寒くはないかいと声をかけると
ニコッと笑って首を横に振る

かくれんぼ

かくれんぼしようよ
はやくこっちへおいでよ
大きな池も 静かな道も
ホラみんな昔のままだよ
かくれんぼしようよ
はやくジャンケンしようよ
そよぐ風も お寺の鐘も
ホラみんな昔のままだよ

君が顔を伏せて 数を数えだす
僕はこっそりと 大きな木に隠れて
ああ いいね いいね 無邪気だね
どこかなって捜す 君の笑顔が
ああ いいね いいね 綺麗だね
ホラやっぱり昔のままだね

かくれんぼしようよ
あの頃みたいに
ちっちゃな体にお揃いで
かすりの着物 ちゃんちゃんこ
かくれんぼしようよ
あの時までのように
君が行ってしまう 手を振りながら
お別れの時 泣いちゃった僕

いま僕とかくれんぼ あの時の君
めぐり逢い そして いま見つめ合う
あのかすりの着物 まだ持つてるかい
あの時 泣いちゃったんだ
ああ そうだね 月日は流れたね
すっかり 僕たち 大人になったね

ああ いいね いいね かくれんぼ
君と僕 かくれんぼ
ああ いいね いいね 無邪気だね
ホラやっぱり昔のままだね

暗い心の底にへばりつく

次は、もうどうしようもない未熟者2連発で、いつもこんなふうだったのだと思います。

タバコは20歳くらいでやめたんじゃないでしょうか。大学に入ってから吸い始めて、お酒を飲むと吸いたくなり、でも吸うと翌朝の喉と胸の具合が悪く、身体に合っていないと思いやめようとして、でも吸いたくなったら友だちから貰ったタバコにして、そうしているうちに吸わなくなりました。50年前のヤニはしっかり歯の裏に残っています。ちなみに、ビールは中3の町対抗のソフトボール大会後の優秀カップ返し飲み、日本酒は高2の自宅での父のマージャン接待後のお銚子の残り物を隠れてラッパ飲みしたのが、デビューでした。

不機嫌

俺のいまのこの不機嫌さは
当然 俺自身 勝手に作り出したもので
そばの奴らの気持ちまでも滅入らせる
そんな悪質なもので
まったく悪質なもので

そのきっかけの現象を取り出してみると
なんでもないようなさっきの場所
ただあいつは俺から少し離れていて
俺は人の存在だけを感じてうつむいて

そのとき必要な話もとくになかったし
そばにいるだけで楽しいような
俺にとってそういったあいつでもなし
でもいま俺を覆っている
不機嫌さは生まれてしまった

いまはもうきっかけは

姿を薄くしたかのように
自分自身にも明らかな答えが得られない
そんな漠然とした吹っ切れない気持ちを
不機嫌さとしてかっこつけている
自分が見える

いまはその連続を断ち切る
きっかけもなく
夜中の街中のわびしさも加勢して
いまのこの不機嫌さを
無理に理由づけながら
俺の人間をさらけ さらけ出している

ふっきれない気分のままに
不機嫌な態度を装い
かっこつけの無言のうちに
自分をさらけ出す

夜

灯りのない部屋に一人すわりこみ
街の騒がしさもどこかへいった
煙草の煙を吐き出し目に染みてきて
顔をしかめて頭をしんみりこづく

今日一日がまた後悔で終わり
暗闇を抜け出そうと時計は時を刻む

ちっちゃなことに心を奪われて
またあいつとうまくやれなかった
あいつの目は俺を見ているのに
俺の目は自分の心にへばりついた

今日一日がまた後悔で終わり
暗闇を抜け出そうと時計は時を刻む

へばりついてばかりじゃいけない

ウジウジばかりしている自分が好きじゃな
かったんでしょう。そうでなけりゃ『試み』な
んてしないと思います。

試み

頭をかなり強く叩いてみたのですが
べつに変化はありませんでした
両目を手の甲で何回もこすったのですが
何の変化もあらわれませんでした

今までの悪いことを
すっかり忘れてしまおうと
首を回して目を大きくあけました
はじめのうちはそのことに
一生懸命でしたが
昔のことをまた思い出してきました

何かを期待したのですが
もしかしてと思ったのですが
私のその願いは裏切られました
私はまた同じ自分の
ケースに入ってしまった
大きなあくびをしたのです

これからも時々
いろんな試みを試みましょうか
万に一度でも打ちどころがよくて
今の自分と違う自分が新しく生まれたら
そしたらもうけものだと思ひましてね

僕から君へ

次の『いらだち』は、僕のじゃなくて君の…
です。そして『君の涙』『君の横顔』です。

いらだち

君の声はとつてもいらだっていて
あの優しい君に
誰かが意地悪したみたいで
電話で君の一人の声を聴くと
こうして離れてる自分がいらだたくて

君は精いっぱい僕にぶつけたらいいのに
そして僕のそばで
静かに眠れたらいいのに

君をしっかりとこの胸にうずめて
そのいらだちを静かにいやしてあげたい

この電話のコードを手繰り寄せたら
君が僕の胸に飛び込んでくるのなら
いいのに

君の涙

君があのと看涙を見せたものだから
僕は胸がきゅっと痛くなった
君はみんな自分が悪いというけれど
君は自分をとつてもいじめるけれど
このあいだ ちっちゃな子どもに
道でぶつかつて
君は心からごめんねつて言つたよ
君は自然にやさしさを見せたよ

君があのと看涙を見せたものだから
僕は君をしっかりと抱きしめた
私はこれだけダメな女なのよと
君は自分をけなしてみせるけれど
僕の脱ぎ捨てるシャツとズボンを

僕のいないまにきちんと畳んで
いてくれたよ
そのやさしさが眩しく輝いていたよ

そんな君のしぐさが
君の教えることよりも
ずっと ずっと 心に響いたよ
僕は君の涙を拭いてあげたよ

君の横顔

僕をそばに感じていない
君の顔を見たんだよ
君はひとりで歩いていた
僕に気づかず歩いていた

化粧を始めた君は
すっかり大人になって
僕が君を知らなければ
気にもとめないわけなんだ

僕のことを忘れて
君ひとりの顔をしていても
僕を見つけたなら微笑んで
駆け寄つてきてくれると思つたよ

声をかけたら すぐにふたりの世界に
入り込めたんだけど
ひとりの君の横顔を
そつと見つめていたかつたんだよ

仲間と出合い微笑む君は
急ぎ足になって
僕も足をはやめながら
後ろ姿を見送つたよ